

CONCORDAN(S)E

ダンスと文体は融合するのだろうか。

振付家と作家が出会い演じるコンコルドダンスフェスティバル。今年は6週間に渡りパリとパリ郊外及び、ブレスト、ディジョンなどの17会場で行なわれるという盛り盛り・照明付きの舞も良いけれど、観客など客と近い所での公演の方が評判が良いという舞も聞いた。今年の新しい舞は成功したようだ。フランスがわからないと...という不安はあるものの、観るものもある。怖がらずにお見あれ。

アンドレア・シッテ+フレデリック・フォルト 「Posaune, fantasmagorie」

「はダンスじゃないけど」と言いながら踊り、段ボール箱に囲まれても分析結果をしゃべり続けるフレデリック・フォルトは、大した役者だ。そして、おとなしそうな舞をしているのに、やることは、力強いアンドレア・シッテ・ハイヒールでチャールストンを踊り、へんてこマイクの前で演舞をぶち上げる。それぞれが独立しているながらも、相手を意図的に置く2人の舞が好きだった。(4月2日 le colombier)

ファブリス・ラマランゴム+エマニュエル・バヤマック=タム 「En amour, il faut toujours un perdant」

四角い部屋を回想させる4本のスポットライトの白っぽい明かり。身と体重を重く静かなナレーション。男が下手から、女が上手から入り椅子に座る。リズムのいい音楽で、ゆっくりと正面を向いた男は、ゆっくりと服を脱ぎ始める。近くにいるのに距離がある2人。舞を付きつけても隔たりがある。2人でいることの意味。することって何だろう？好きだからこそぶつかるの？舞する事は失う事？取っ組み合いの喧嘩になるけれど、それでも一瞬に2人。面白い始まりだったが、平凡に変わってしまった感がある。(4月2日 le colombier)

ベアトリス・マッサン+ファビエンヌ・イヴェール 「Coco le roi du balai」

バロックダンスの第一人者、ベアトリス・マッサン「でも今日はバロックダンスじゃないのよ」といいながら、やっぱり身振り手振りはバロック舞で、優雅だ。水色の足ひれが投げられ、モップを持ち、毛皮のコートをからかぶり、ワルツをゆっくりひとり踊る。作家のファビエンヌが出てくれば、仲の良い2人のたわいもない会話が、歩いて行く。モップ2本を積み立てて毛皮のコートを敷けば、テントの出来上がり。モップでこげばコートに2人。モップの柄で赤い毛糸を、首にかければすてきなネックレス。言々と歌声。いつもニコニコしている仲の良い2人。Balaiとはほうきのこと。ほうきで、おばさんの会話が微笑ましい。(4月22日 CND)

ミカエル・フェリッポー+セリア・オダール 「Enjoy the silence」

朗読される文章は、風景描写・町の様子だったり、天候だったり、登る2人も日常の行を、見るだけ。ジョギングして、舞を、ポテトチップスをつまみながらピルを飲んでテレビを、雨が降ればレインコートを着て雨宿り。「なんで黄色が好きなの?」「子供のインコを、ってたから。」何もない2人の存在だけれど、2人にしかない舞の流れ。(4月22日 CND)